

2章 「科学する心を育てる」実践事例

子どもたちの「科学する」心は、どのような場面で育っていくのでしょうか。

自然の中で驚き、感動する。遊びの中で疑問を持ったり工夫したりする。人とかかわりを通して好奇心を膨らませていく。こうしたさまざまな場面で、子どもたちの「科学する心」が育っていきます。

第2章では、各園が捉えた「科学する心を育てる実践事例」を次の3つのパートに分けて紹介します。

A.自然の中に「科学する心」がある B.遊びの中に「科学する心」がある C.人と地域とのかかわりの中に「科学する心」がある

A. 自然の中に「科学する心」がある

A-1. 「赤ちゃんジャガイモ?!」ジャガイモの不作から学ぶ 西戸山幼稚園(東京都新宿区)〈5歳児〉

状況

4歳児の頃に植えたジャガイモ。自分たちで植えたのだが、プランターを保育室前から離れた場所に置いてから関心が向かなくなる。教師も間引きを忘れ、気付くと黄色くなってしまった葉っぱたち…だった。その時点で間引きを行ったが、苗はあまり元気にならない。

年長になり、保育室からもまた、より離れた場所になったプランター。余計に幼児の意識がなくなった。フィールドビンゴの中にジャガイモを入れたが、はじめの確認の時に分からない幼児が多かった。意識をもつには、やはり幼児の目の届くところにあった方がいいと、プランターを保育室の近くに移動する。あまりにひよろひよろで、「ジャガイモ?!」という感じをもったようだ。

これ以上育てていても、すすくとは伸びていかないと思い、掘ってみることにする。教師が前日に少し見てみると、とても小さいジャガイモがごろごろと出てくる。全くないわけではなさそうだったので、翌日幼児と掘る。

事例

子どもたちと教師と一緒に掘る。少し掘ると、小さなジャガイモが出てくる。「あつ!」「小さい…!」教師が「花が咲かなかつからできているかがわからなくて不安なの」と言うと、「お水が足りなかつたのかなあ」と言いながら掘る。掘り出すと、すぐく小さなジャガイモがたくさん出てくる。「赤ちゃんみたいだね。」少し大きい(普通サイズの)ジャガイモが出てくると、「これは大きい!」とうれしそうにする。掘っている間は、とにかく土の中から出てくるのがうれしいようで、あまり小さいのも気にしていない。

全部掘り終わっても、見渡す限り小さいジャガイモ…。大きさ比べをしようにも、大して変わらない。「う～ん、やっぱりあん



まり大きいのがなかつたね…」と教師が言うと、「そうだね。」「一口で食べられちゃうね。」「皮をむいたらなくなっちゃういそうだよ。」という声があがる。「でも、たくさんあるよ。数えてみようよ。」「幼稚園のみんなの分がある?」という園長先生の言葉に、数え始める。「まず、いちご組。」「1～16、それと、I先生の分。」というように、さくら組、すみれ組、先生たちと続いた。

学級で集まった際、みんなに報告をする。「ジャガイモがとれたけれど、こんなに小さかつたの…」と教師が言い、「どうしてだろうね?」と問いかけると、「お水が少なかつたんじゃない?」という答えが1番返ってくる。「みんなあげてたかなあ。どこにおいてあつたかなあ。」「プランターの所…」という小さい声。「お水をあげなかつたことだけかな?」という「お日様の光…?」「いっぱい晴れていたと思うよ」「じゃあ、お水だ。」ということになった。「お水がないと、植物はいきていけなかつたんだよね。」



考察

みんなで植えたのに、どんどん関心が薄れてしまつたのは、まず、教師の意識も薄かつたことがある。植えたらよし、というところがあつた。また、保育室前から、あまり目の届かぬプランターのところにプランターを移したため、意識から外れてしまつた。このことから、教師が持続性をもち、幼児にきちんと意識づけていくことや、幼児の目の届く場にプランターを置くこと(環境)が必要である。

今回、小さかつたのはなぜかと問いかけたら、水という答えがほとんどだつたのは、栽培に対して、幼児の知識があまりないのだということがわかつた。それだけ、共に教師が考え、伝えていないということなので、日常の積み重ね、持続性が大切である。

ポイント

ジャガイモの不作。そこに子どもが栽培に継続的にかかわることの難しさが浮き上がってきます。子どもの目に入りやすい位置、保育者の意識。子どもが興味・関心を保つために、配慮しなければならない大切なポイントが見えてきます。単に「だめだつた…」と終らずに、「どうしてだろう?」と、保育者が振り返りながら、また、子どもと一緒に今後の課題を考えている様子が伝わってきます。そのことが次の保育へとつながると思います。